

Title	アラビヤ人の所謂Kalah (Killah)について
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.54- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0054">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0054</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## アラビヤ人の所謂Kalah (Killah) について

「歴史と地理」二十九卷二號に駒井義明君が、右の題でアラビヤ人のカラー、唐代の箇羅を今日のマラッカに比定されてゐる。この問題については桑原隠藏氏が「薄壽庚の事蹟」一一五一七頁にノートとして「キラーの位置」を述べ、西人の所説として Groeneweldt の マレイ半島西海岸 Korn 説 Van der Lith の同海岸の稍南に當れる Kedah 説、Ferrand の マレイ半島東海岸の putani 説を擧げてをられるが、フエラン氏は、同書の英譯が、東洋文庫から、出版された時、予に手紙をよこされて、桑原氏は佛語も英語も知らぬこと非常に憤慨された抗議をなされた。今フエラン氏の Le Kraouen-Louen et les anciennes Navigations P. 230—238, (J. A., No 2.Sept.—Oct., 1919) を見ると氏は、アラビヤ人の karā を今日のマレイ西海岸 le Kra に比定し、これと新唐書の箇羅とは全然別のものであるとし、後者をパタンのそばに比定してをられる（松本信廣）。

### 寄稿家紹介

- 藤原守胤氏 慶應義塾大學部法學部政治科大正十四年出身、後英米に遊學、ハーバード大學に於て米國憲法史を専攻する。
- 細川龜市氏 昭和三年法政大學卒業、小野武夫博士の指導の下に日本社會經濟史を研鑽、最近殊に日本庄園社會經濟史の研究に没頭する。著書に、「日本寺院經濟史論」「日本上代佛教の社會經濟」「日本寺領庄園經濟史」(近刊)等あり。
- 小島武男氏 大正十三年東京外國語學校支那語科ロシア語科出身、大正十四年山口高等商業學校卒業、現在東大圖書館に司書を勤務する。